

千枚田に魅せられて

堂前 助之新

聞き手・田口 綾華 宮下 三羽 (石川県立門前高等学校1年)



ベテラン米作り職人

名前は堂前助之新。昭和19年1月3日生まれ今年72歳です。家族構成は、妻、息子夫婦、孫3人の7人家族です。

学校は南志見の中学校を出て、今はないんですが石川県経営伝習農場という農業専門の学校に1年間行ってきまして、帰ってきてから、今のJAに45年間勤めました。理由は農業に関係する仕事をしたかったからです。今はずっと輪島に住んでいます。米作りは定年後もしているの、もう57年くらいやっています。

米作りの仕方

自分の家の田んぼは皆さんと同じ感じでした、5月上旬に田植えして、9月ごろ稲刈りをします。違うのは、はざ干しですね。はざ干しというのは、稲架に、刈り取った稲をかけ、

天日干しします。この白米千枚田にも10段と8段のがあります。はざ干しは手間がかかりますが、味も香りもいいんです。それと千枚田では、3年前から水苗代というのもし始めました。水苗代の場合は、田んぼに直に種籾をまいて、そこでもって苗を育てて、ある程度育ったら苗をいっぺん取って、そして本田に植えます。

千枚田は小さい田んぼが多いですから、大きい機械が入らないので、小さい機械、畑を耕すものですね、それで田んぼの中の土を耕します。その小さい機械が入らない田んぼは鍬で耕しますが、人手が普通の約5倍から6倍はかかります。

千枚田は朝から日が沈むまで日があたってますし、風通しが良いものですから、病害虫が発生しにくいので、農薬を使わずに出来るということと、水も高洲山から出てくる湧き水を集めて、きれいな水で米をつくっています。土地全体で4ヘクタール。田んぼが2ヘクタール、あぜとか土手で2ヘクタールですから、米は千枚で約6トンくらいとれます。大き

い田んぼもありますし小さい田んぼもありますから、1枚だと平均して約6キロとれますね。

土手を刈るときは、鎌とか草刈り機でするんですけど、ここは土手が急なものですから大変です。やはり作業中の怪我というかね、他の仕事でもいえるんですが、千枚田は、どの作業も体を使つての仕事になりますからね。皆さんそれぞれの体調の管理というか、十分休憩を取りながらね、仕事をするとすることを基本にしております。

千枚田の耕作は昔からの農法での米作りです。大型機械が入らないということで、^{くわ}鍬なり鎌なり使つての作業になってくるんです。他にも、苗を植える時には田んぼに線を引く^{わく}枠という道具を使っています。そのぶんですなやはり価値の高いお米になります。千枚田は観光資源として、多くの方が来られて見学され、地元の特産品を買ったりしてもらっています。そのことでこの地域全体がですね、活性化できればそれでいいかなあということも思ってるんです。

今は、白米千枚田愛耕会（*1）30人で443枚作っています。一人でやると約300日かかります。米作りは、短い期間なら4～5ヶ月の間でできるんですけど、昔ながらの農法だとそれくらいかかるので、千枚やるには約700日ぐらいかかることになりますかね。

仕事は、暑いときに大変なだけけれど、一枚の田んぼは小さいから5分や10分で終わる田んぼもありますから、気分転換できて気持ちいいです。

今一番小さい田んぼは道の下にあるんだけど、4株で新聞紙1ページほどですね。ここの田んぼの特徴は、普通の大きい田んぼは水路から1枚1枚の田んぼに水を入れるようになっているんですけども、千枚田は一枚の田んぼからダム方式で、たまったら下の田んぼに水が流れる。まあ100枚近く、一つの水が流れていく形になっているものですからね、

水管理は大変ですね。

（*1）白米千枚田愛耕会：白米千枚田で持ち主が耕作できなくなった田んぼを耕作しながら、「白米千枚田オーナー制度」の稲作指導及び田んぼの日常管理を行っている。平成18年、堂前さんが同級生等に呼びかけて設立。南志見地区住民等で構成。

千枚田の歴史と今

この白米千枚田ができたのは約380年前といわれています。今まで一番耕作放棄が進んだ年というのは昭和50年ごろですね。約4割も草地になっていました。その時に愛知県の^{あんじょうひがし}安城東高校の生徒たちが、能登一周の修学旅行で千枚田に来られて、この景色を見たとき、見るに堪えない状況だったと思うんですけど、もうその時には輪島市の文化財となっていたんですね。千枚田を守るため、何か手助けをしたいと昭和57年から10年間ですね、毎年約450人の生徒さんたちが修学旅行の一環として、千枚田の草を鎌で刈ってくれたんです。それがきっかけになって、他県の生徒達も頑張ってくれているので、私も頑張らないかんとということで田んぼに還そうと気運が盛り上がり、地元の市役所、農協、会社等がボランティアで復田に取り組み、今の棚田になりました。

お米はオーナーの方に特典としてあげるものですから、一般の市場に流通するだけの量がないということで、売店で絶景米として、土産物用に販売をしています。平成25年にポケットパーク（道の駅・千枚田ポケットパーク）の再生工事がされたんですけど、その時にここのレストランと売店の運営について、地元の南志見地区の方が千枚田の耕作で頑張ってるんで、地元で運営したらどうかという話がありましたので、活性化事業組合を立ち上げました。ほんで今、南志見地区の皆さんがですね、男性の方は米作りをするし、女性の方はレストランや、売店で野菜も販売という形でして



（上）安城東高校の記念碑
（左）千枚田を案内する堂前さん



(上) オーナーの方の田んぼ
(下) 稲刈りをするオーナーの人達



おります。南志見地域の活性化という面からみれば、千枚田で米づくりを続けてきて良かったですし、千枚田を核として、地域の活性化にもつながってきていることが一番大事な事かなあと考えてます。

オーナーさんと助け合いながら

オーナー制度はですね、これは全国各地に色々ありますけ

ど、白米千枚田オーナー制度の特徴は、一枚の田んぼが小さいもんですから、マイ田んぼというかたちで、一枚一枚、春先に作業をし始める時に、この田んぼは私が作りますということで、選んで契約してもらうわけです。するとそのオーナーさんが、最初の田起こし、鍬で田んぼを耕すんですけども、それとあぜ塗りの作業、田植え、その後に雑草の草刈り3回、そして9月の稲刈り、と合計7回の作業をするんです。自分の田んぼの作業をした後、小さい田んぼの方はすぐに終

わかりますので、隣の大きい田んぼのお手伝いをしています。あるいは来られなかった方の田んぼのお手伝いだとか。基本的にオーナーの皆さんで助け合って米づくりをもらうということになっています。どうしても来られないとか、日常の管理も大切になりますので、それは私達愛耕会のメンバーで、見回りなり作業なりをしているということですね。

初めて米作りをする人が多いので、一緒に米作りをするんですけど、楽しみながらやっています。やっぱりあぜ塗りの仕事がね、なかなか大変で、悪戦苦闘というか……。でも教えてあげると出来上がってきますんで、満足してくれたり、やれば出来るんだなという気持ちになってもらえますね。そして、地元農家やオーナー同士の交流の場としても喜ばれています。

愛耕会のメンバーは今30名います。オーナーさんの今年的人数は176名ですね。オーナーさんのなかでも企業さんや、一般のオーナーさん、それと自分で田んぼを持たないけれど、米作りは支援しますよと言う気持ちを持っている方には資金的に支援してもらうなどありますね。

残したいもの

世界農業遺産のシンボルである白米千枚田は日本の原風景です。昔、大きい地滑りがあり、そのあと残った土地で田んぼを作り、城の石垣みたいな感じで小さい田んぼが段々に積み重なった棚田です。今は観光資源として注目されていますが、先人達がよくぞ今まで耕作を続けてきたことに感謝するとともに、やはり何としてでも次の世代にこの綺麗な千枚田での米作りをバトンタッチすることが、大事な部分だと思っています。現在のところ愛耕会も1年に2~3人メンバーが入れ替わるという形で、定年退職後の人が入ってきておりますので、頑張って米作りを続けていかなければならないと思っています。

[取材日：平成28年8月2日・8月22日]

PROFILE

堂前 助之新 どうまえ すけのしん

昭和19年1月3日・73歳
農業、白米千枚田愛耕会 代表

農家の長男として自分の家の田んぼをする傍ら45年間JAで働き、定年退職してから千枚田での田んぼ作りを定めた。同級生などに呼びかけて「白米千枚田愛耕会」を設立、耕作2年目にオーナー制度を開始。千枚田の耕作放棄地を44枚復田する。



● 取材を終えての感想 ●



私は初めての聞き書きで、ちゃんと完成させられるかなあと不安でしたが、完成させる事ができたので良かったです。特に書き起こした文章をレポートとしてまとめるのがとても難しく感じました。

堂前さんのところへ取材に行くと、千枚田の事について話していると、千枚田の耕作放棄地は安城東高校の人達の手で今の姿になったということや、水は上の田んぼから下の田んぼへとダム形式で流しているという私の知らない千枚田の事を知ることができて、とても良かったなと思いました。それとあまり千枚田や農業に興味は無かったけれども、千枚田の事や堂前さんの思いを聞いて興味を持つようになりました。これからも、有名な能登の千枚田を残すことができたらいいなと思いました。

(田口 綾華 写真：左)

取材や書き起こし、レポート作成など、最初は戸惑いしかなくて、これはきちんと完成するのか……と最初はハラハラしましたが、こんな風に形にできてとても嬉しいです。このような貴重な経験はそう簡単に味わえるものではないし、この経験を様々なことに活かせたらなと思います。

最初は千枚田と聞くと、景色が綺麗な所という印象しかなくて、堂前さんの話を聞いていくうちに今は綺麗な千枚田にも前は耕作放棄地が多かったと知り、とても驚いたのを覚えています。色々と詳しく教えてくださった名人の堂前さんや、聞き書きの先生方には本当に感謝しています。ありがとうございました。

(宮下 二羽 写真：右)